

Go Down, Moses 再考

——タイトルの変更をめぐって——

花 岡 秀

Go Down, Moses は 1942 年に Random House 社 から *Go Down, Moses and Other Stories* というタイトルで出版された。しかし、1949 年の第二刷からその後半部分の *and Other Stories* が削除されて現在のタイトルに変更された。しかも、この変更が William Faulkner 自身の要請によるものであった⁽¹⁾ことも手伝って、この作品を一つの長篇として扱うべきか、あるいは単なる短篇集として扱うべきかの議論が繰り返されてきたことは周知の事実である。この作品の統一性をめぐる議論は、おおむね、この作品を構成する一つ一つの物語の主題、あるいは物語の連続性に着目して展開されてきたが、その結論の行方は別としても、いずれの議論もいささか歯切れの悪いものとなっていることは否めない。こうした議論の歯切れの悪さこそ、このタイトル変更が孕む問題の複雑さを端的に物語っていると言えよう。

本論では、作品の統一性をめぐってこれまで成されてきた基本的な議論を視野に収めながら、この問題を再検討するとともに、タイトル変更の意味をさらに異なった角度から考察してみたい。

I

Go Down, Moses に統一性を認めようとする議論の中心を占めてきたものが、この作品を McCaslin 家の物語として捉えようとするものである。作品全体を読み繋ぐことによって、McCaslin 家数代にわたる歴史が陰影を湛えなが

らも鮮やかに浮かび上がることを思えば、多くの批評家がこぞってこの一家の物語を軸とした統一性を指摘してきたことは首肯できよう。Faulkner 自身が出版約一年前に Robert K. Haas に宛てた手紙の中で、「白人と黒人の関係を全体的な主題とする」⁽²⁾ 構想を語ったことも、このような見解に一層の妥当性を与えている。それは、McCasin 家の歴史とは、Lucius Quintus Carothers McCasin の忌まわしい近親相姦に端を発する黒人の家系、Ike (Isaac McCasin) で途絶えた直系、そして女系の Edmonds 家の緊張を孕んだ関係の経緯でもあるからである。しかし、このような主題、及び物語の連続性からこの作品に統一性を認めるにはいささか無理があることも確かである。

この作品を McCasin 家の物語として捉えるに際して、しはしば問題とされてきたのが “Pantaloon in Black” である。Go Down, Moses を McCasin 家の年代記として理解した Cleanth Brooks は、この短篇を「不必要な部分」⁽³⁾ と見做したし、Stanley Tick は、この作品を一つのまとまった小説と認めながらも、“Pantaloon in Black” だけは「構成上からは統一を乱す、したがって重要ではない」⁽⁴⁾ 短篇とまで述べている。John Pilkington もまた、この短篇を前後の短篇の基調から著しくはずれるものとして、不適切であると指摘⁽⁵⁾ している。Rider が「Carothers Edmonds から小屋を借りて、Uncle Lucas Beauchamp の話にならって結婚の夜に暖炉に火を起こした」⁽⁶⁾ ことが短篇の中で言及されているとは言え、McCasin 家の物語として Go Down, Moses を眺める際の “Pantaloon in Black” の据わりの悪さを指摘する批評家については枚挙に暇がない。実際、Rider はたまたま Edmonds 家から小屋を借りていたという点を除けば、McCasin 家とは何一つ係わりを持たないためである。しかし、後に触れるように、「白人と黒人の関係」という主題からすれば、この短篇が Go Down, Moses においてきわめて重要な位置を占めることは言うまでもない。

「白人と黒人の関係」という主題から少なからず問題となるのは、むしろ “The Old People” であろう。この物語で、Ike に狩猟、荒野の掟を教え、文明の汚れを逃れた原始の世界へと彼を導いた Sam Fathers とその祖先の物語が披瀝されるとは言え、Sam よって導かれた Ike の荒野における神秘的なイニシエー

ションを中心とした物語であることにはかわりはないためである。

Go Down, Moses の統一性を考察するにあたって、もっとも示唆に富む指摘は、McCaslin 家を軸とした人種問題と荒野をめぐる問題の二つの主題をこの作品に読み取ろうとするものである。しかし、William Van O'Connor をはじめとして⁽⁷⁾、多くの批評家がこの点を指摘しながらも、作品の統一性と係わりで、この二つの主題の並置を肯定的に論じたものは見当たらない。たとえば、Pilkington などは、「Faulkner がこの二つの主題を納得がいくように関連づけることに失敗したことが、読者にとって決定的な障害となっている」⁽⁸⁾と手厳しい判断を述べている。しかし、*Go Down, Moses* に認められるこの二つの主題こそ、作品の統一性及びタイトル変更の意味を探る重要な鍵となっているように思われる。

II

「白人と黒人の関係を全体的な主題」と認めながらも、個々の短篇にその主題を探るだけで、作品全体を視野に入れ、短篇相互の有機的な関係から「全体的な主題」を解き明かした研究はほとんど見当たらない。ここでは、まず、人種問題がどのように「全体的な主題」となっているのかを明らかにしなければならない。

白人と黒人の関係、すなわち人種問題という主題から *Go Down, Moses* を眺めるとき、“Was” と “Pantaloon in Black” 及び “Go Down, Moses” の三篇と、“The Fire and the Hearth” と “The Bear” ならびに “Delta Autumn” の三篇から成る二つのグループが鋭い対照を浮かび上がらせている。

まず最初の三篇から映し出されるものは、人種という越えがたい溝によって分断された南部の姿である。時代背景が 1859 年に設定された “Was” では、McCaslin 農園の黒人奴隷である Tomy's Turl の逃亡劇の顛末が語られる。Uncle Buck や Uncle Buddy による長閑かな Turl の追跡の様相がユーモラスに語られるが、実際には猟犬を用いての狐狩りと寸分違わぬ光景が展開されるので

ある。揚げ句の果てには、Turl はポーカーの賭の対象にまでされることになる。南北戦争以前にはこのようなことはさして珍しいことでもなかったとは言え、彼の主である Buck や Buddy がきわめて良心的な奴隷所有者であったこと⁹⁾を思えば、逆にこの「追跡」が孕む悲劇的要素は一層深刻な色調を帯びたものとなる。

“Pantaloone in Black” では、結婚後わずか半年で妻の Mannie を失った黒人 Rider の癒されることのない悲しみが描かれる。妻を失った深い悲しみに駆り立てられて絶望的な行動へと走った Rider を、保安官補は次のように自分の妻に語る。

「あのいまましい黒ん坊どもめ、」(中略)「まったく、ああいう奴らがいるというのに、今みたいに面倒事が少ないのは不思議というものだ。何故だと思う？それは奴らが人間じゃないからさ。たしかに、奴らは人間みたいに見えるし、人間みたいに二本の足で歩かし、しゃべりもすれば、奴らの言うことをこちらが理解することもできる、それに、少なくともときには、こちらの言うことを理解しているような気がするときもある。でも、こと、まともな人間の感覚とか、人間の感情などということになれば、奴らはくだらん野牛の群も同然なんだ」(154)

黒人 Rider の胸中などまったく理解しようとしないうこの白人保安官補の言葉は、南部の白人の多くが黒人を捉えてきた「眼」、あるいは意識的に黒人をそのように位置づけてきた白人の姿勢を集約するものである。物語の時代背景は、*Go Down, Moses* 全体の中での現在、すなわち 1940 年代のはじめと考えられるが、この時代に至ってもなお、依然として人種によって分断された南部の現実が浮かび上がってくる。

“Go Down, Moses” もまた、時代背景は *Go Down, Moses* 全体の中での現在に置かれている。弁護士の Gavin Stevens が、Molly Beauchamp、さらには彼女のもとの主である Miss Worsham の小金を添えての依頼で、シカゴで殺人を犯し処刑された Molly の孫の Samuel の遺体を Molly の家まで送り届ける顛末が語られる。Stevens は新聞社の編集長とともに不足分の金の寄付を募って費

用を調達するが、こうした一連の経緯から Jefferson の町における白人と黒人の関係に新たな局面を認めることも可能であろうが、この物語を新たな「共同体の意識を力強く確立する」⁽¹⁰⁾ほどのものと見做すことには躊躇せざるを得ない。Stevens を“Pantaloone in Black”における副保安官に重ね合わせることは⁽¹¹⁾いささか極端としても、彼にとって「黒人の生活、思考、感情の様式」⁽¹²⁾が不可解なものであったことは疑い得ない。彼が共同体の人びとに寄付を募る際に、「死んだ黒ん坊を家に連れて帰るためのものなんだ。Miss Worsham のためなんだ…」(378)と繰り返していることは、Jefferson の共同体の限界性を示している。それは、「白人」である Miss Worsham のため、という理由を付けずには金を集められない現実を窺わせるためである。この作品でも表面的にはいささか趣を異にしているとは言え、やはり人種という壁によって隔てられた南部の姿が映し出されている。

“Was”と“Pantaloone in Black”及び“Go Down, Moses”の三篇は、人種によって分断された南部の現実の諸相を映し出すものとなっている。

しかし、“The Fire and the Hearth”と“The Bear”及び“Delta Autumn”の三篇から窺われる南部の姿は、一見前述した三篇が映し出す南部の諸相と同じように見えながらも、まったく異なった南部の現実の 恐るべき一面を示すものとなっている。

全体が三章から成る“The Fire and the Hearth”の第一章では、Tomy’s Turl の息子 Lucas Beauchamp と、密造酒造りの競争相手 George Wilkins との間の一悶着が語られる。第二章は、埋蔵金貨の掘り出しに夢中になった Lucas が、金貨の探知器を売りつけたセールスマンを出し抜く話である。第三章は、金貨捜しにわれを忘れた Lucas に愛想をつかした妻の Molly が、Roth Edmonds に離婚をしたいと訴え、Roth が Lucas の改心に骨を折る物語である。

物語の時代背景は、Lucas が六十七才になっている 1941 年に設定されている。こうした一連のエピソードが語られるなかで、Lucas と Roth の回想の中に見え隠れする McCaslin 家の家系とその歴史の断片は、注目に値するものとなっている。

Roth を生むと同時に母親が亡くなったため、父親の Zack Edmonds は、Lucas の妻、Molly を母親がわりに半年も屋敷に住まわせる。Lucas は、Molly を連れ戻すべく、決死の覚悟で Zack と対決するが、白人と対等に向き合う彼の姿勢とともに、「おらあ黒ん坊だ。(中略)けども、おらあ男だ。しかもただの男じゃねえだ。あんたのばあさまを生んだその人が、おらのおやじを生んだんだ」(47)と語る彼の言葉は、読者に得体の知れぬ不安を抱かせる。読者は、「父方の McCaslin である Lucas」(44)という言葉の意味を、この物語では推し量ることはできない。さらに、Ike が、当然相続すべき McCaslin 農園の相続を放棄したことが何度も述べられるが、その理由は明確には述べられない。読者にこうした謎を投げかけたままこの物語は閉じられる。

ところが、“The Bear”において、読者に投げかけられた上記の謎が解き明かされることになる。Ike は、十六才の時、McCaslin 家の台帳を見て、自らの家系の秘密を知り愕然とする。祖父の Carothers McCaslin は、奴隷の Eunice に子供を産ませ、その娘 Tmasina とも関係し、Lucas の父、Tomy's Turl が生まれたことを知る。その結果、Eunice が絶望のあまり入水自殺を遂げたことを知るのである。Turl の子供たちが成人したら千ドルづつ与えるという老 Carothers の遺言を読み、Ike は、「なるほど、黒ん坊に向かってわが息子と呼びかけるよりはそのほうが安くついたというわけだ」(269-70)と洩らす。“The Fire and the Hearth”の主人公であった Lucas をはじめとする McCaslin 家の黒人の家系が、老 Carothers の近親相姦に端を発した事実が開示される。それを知った Ike は、老 Carothers の罪の穢れと、黒人の血の犠牲のうえに成り立つ農園の相続を拒絶するに至ったのである。

“Delta Autumn”は、1941年の出来事を扱った物語である。その冒頭の部分は、齢八十に近づいた Ike が、あたかも人生の終局に臨んで、来し方を回顧するような、穏やかな響き、挽歌の響きを読者に覚えさせるものであるが、実は老 Carothers の罪を彷彿とさせるような事件が明るみに出ることになり、Ike を愕然とさせることになるのである。Ike の農園放棄により、農園を相続した女系の Edmonds 家の末裔ロスが、Lucas と兄弟の Tennie's Jim の孫娘と関係

をもち、しかも、最終的には、一定金額の金を送金者の名前を明かさずに銀行に振り込むことによって、彼の子供まで産んだその女性を、黒人の血が流れているという理由だけで捨てるのである。Roth とこの女性の血縁関係は、近親相姦と呼ぶには薄いものであることは事実であるが、Ike からすれば、この Roth の行為は、老 Carothers の罪を想起せざるを得ないものであったことは想像に難くない。

これら三篇から窺われる南部の姿は、やはり、人種によって深く分け隔てられた現実であるが、ここでは、黒人と白人の血の混交がきわめて重要な意味をもつ。それは、最初の三篇から映し出された、南部を二分する、越えることなどまったく不可能に思われた深い溝が、実は越えられたことを意味するためである。

これら二つのグループ、六篇の物語を読み繋ぐことによって、人種という埋め尽くしがたい溝によって分け隔てられた南部の姿と、その一方で、この越えることなど不可能であるはずの溝が、白人の時々の欲望や享楽によって越えられる現実が浮かび上がることになる。言わば南部の現実の恐るべき表と裏が不気味に映し出されるわけである。これこそ、Roth の相手の女性が黒人であることを知って、「たぶんアメリカでも、千年か二千年もすれば、(中略)しかし、今はだめだ！今は！」(361)と心の中で叫ぶ Ike を震撼させた南部の現実には他ならない。

一方、「荒野をめぐる問題」という主題と深く係わる物語が、“The Old People”と“The Bear”そして“Delta Autumn”の三篇である。まず、“The Old People”，および“The Bear”の第一章から第三章では、Ike が、Sam Fathersによって荒野に導かれ、荒野の住人、狩人としての資格を与えられ、荒野でのさまざまな体験を通して、誇りと謙譲の精神を身につけていく過程が述べられる。十二才の時、Ike は、はじめて殺した牡鹿の熱い血で、Sam によって額に永遠の印をつけられ、一人前の荒野の住人として認められるが、やがて、その彼が多くのことを学んだ荒野の主とも言える大熊、オールド・ベンも殺される。“Delta Autumn”では、その荒野も文明に侵食され続け、奥へ奥へと退行し、

今では Jefferson から二百マイルも車を走らせなければその姿を見ることはできなくなっている。

“The Bear” の第四章で披瀝される、荒野での一連の体験の結果、Ike が土地というものに対して抱くようになった思いは、*Go Down, Moses* 全体との係わりで重要な意味を孕むものとなる。

あの土地を放棄することなんてぼくにはできないよ。あの土地が放棄できるようなぼくの土地であったことなど一度もないんだから。あの土地が、ぼくが放棄できるように、ぼくの父さんや Buddy 叔父さんがぼくに譲れるものであったためし一度もなかったんだ、なぜならぼくが放棄するように、おじいさんが父さんや Buddy 叔父さんに譲れるものであったこともなかったし、譲ったり放棄したりするために老 Ikemotubbe がおじいさんに売り渡すことのできるものでもなかったんだ。なぜなら、Ikemotubbe がおじいさんかほかの誰かに売り渡すことができるように、Ikemotubbe の先祖のそのまた先祖が Ikemotubbe に譲れるようなものであったためし一度もなかったからだ、なぜなら Ikemotubbe が、金のためにその土地を売ることができると気づき悟ったとたんに、まさにその瞬間にその土地は永久に彼のものでも子孫から子孫へと譲られていくものでもなくなり、それを買った者は何も買わなかったことになるからなんだ」(256-7)

Ike の農園相続拒否は、単に、その農園が黒人奴隷の血と汗によって築かれたうえに、その奴隷に対する祖父の罪で穢れたものと成り果てたが故のことではないことが、この Ike の語りから窺われる。祖父にその土地を売った（実際には詐取された）Ikemotubbe やその祖先にまで遡り、人間による土地の私有化そのものを、Ike は否定するに至っている。このことは逆に、Sam の教えや荒野の体験の、Ike に対する影響の深さを鮮やかに照らし出すことにもなっているのである。

“Delta Autumn” では、Sam を師として導かれた彼の荒野の体験、二十一歳の時の農園相続権の放棄が振り返られると同時に、齢八十近くになり、人生の黄昏を迎えた Ike にとって、毎年十一月の二週間を過ごす荒野の、「泥の床のテントと、十分に広くもなければ柔らかくもなく、暖かくさえないそのベッド

こそ、彼の家庭」(352)であり、「何の不安もいらだちもなく」(349)夜と向き合うことができる場となっていることが、語られる。これは、Ike にとっては、荒野こそ、安らぎを与えてくれる何ものにも替え難い場であることを示すとともに、逆に「鋼鉄や油を塗った機械の部品の腐敗」(342)で汚れた人間社会、文明の場との深い断層を示すものにもなっている。

この三篇の作品は、Ike の荒野へのイニシエーションから、土地放棄、そして一種の文明批判へと至る経緯を辿るわけである。しかし、人種問題の主題との絡みで考察するならば、こうした経緯が Ike の McCaslin 農園相続権放棄の理由の一部をなすとは言え、必ずしも唯一の理由とは成り得ていない。それよりもむしろ、Ike の批判は、始祖 Carothers McCaslin に集約される白人の黒人に対する罪を越えて、さらに文明そのものの批判へと拡がりを見せているのである。Go Down, Moses の統一性とは、このような二つの主題の絡みをどのように捉えるかにかかってくるように思われるのである。

III

Go Down, Moses に認められた二つの主題の絡みを考察するに当たって、作品の成立過程を検証することも少なからぬ意味がある。先に引用した Haas に宛てた手紙の中で、Faulkner は、当初の具体的な構想を明らかにしている。それによれば、出版された作品から“Was”と“The Bear”を除く五篇から成る Go Down, Moses を計画していた。しかし、この計画はかなり変更され、最終的には現在の構成をもって出版されることになった。具体的な成立の経緯⁽¹³⁾を眺めてみると統一性をめぐる問題点が一層鮮明なものとなる。

まず、Faulkner は、1941年6月に書き上げた“Almost”という短篇に若干の修正を加えて、タイトルを“Was”に変更している。その修正の主な点は、登場人物の Bayard という名前を McCaslin Edmonds に、Jason Prim を Hubert Beauchamp に変更し、Ike に関する序を付け加えた点である。“The Fire and the Hearth”については、第一章は、1941年6月22日、Collier's に発表した“A

Point of Law”に、Rothの誕生の事情、ZackとLucasの関係など、かなりの変更を加えている。第二章には、1940年11月に*Atlantic Monthly*に発表した“Gold Is Not Always”をほとんど変更を加えずに用いている。第三章は未発表の“An Absolution”に、McCaslin家の過去の白人と黒人の関係をRothが回顧する部分が付け加えられたものとなっている。

“Pantaloon in Black”に関しては、ほとんど変更は加えられていないが、“The Old People”では、1940年9月に*Harper's*に発表されたものに大幅な変更が加えられている。その主な変更点は、物語の語り手を具体的な名前を与えられていない若者からIkeに変えたこと、さらに単なる狩猟の物語からIkeの荒野における神秘的なイニシエーションの物語へと組み立て直したことである。“Delta Autumn”については、1942年5-6月の*Story*に発表されたものと比べると、Boydの名前をRothに、黒人女性をTennie's Jimの孫娘になっている。

“Delta Autumn”を改訂した後⁽¹⁴⁾、Faulknerは当初の予定には入っていなかった“The Bear”に取りかかり、かなりの部分を新たに書き加えることになった。全体的には、1935年12月に*Harper's*に発表された短篇“Lion”からの素材が利用されているが、とりわけ注目に値するのは第二章と第四章である。第二章では“Lion”ではQuentinが語り手になっていたのを全知の語り手にし、老人として登場していたIkeが十六歳に変更された。さらに物語の力点が猟犬から熊の物語へと移され、“The Old People”や第一章とのつながりが滑らかになった。そして、Ikeが二十一才の時の、Old Cassとの長い対話を中心に、十六才の時以来、Ikeが農園の台帳をもとに見つけた彼の家系の秘密が半ば回想的に語られる第四章がまったく新たに書き加えられることになった。さらにこの章では、Old Carothersの近親相姦の罪、Euniceの自殺、アメリカの歴史、南部の歴史、南部の南北戦争参加の意味、黒人と白人の関係、人間と自然の関係、といったことにまで話は及ぶのである。“Go Down, Moses”に関しては、1941年1月25日に*Collier's*に発表されたものがほとんど変更されることなく組み込まれている。

こうした一連の改訂、追加の過程を眺めてみると、*Go Down, Moses* 全体に McCaslin 家の年代記としての関連性を確保するとともに、Ike を McCaslin 家の物語と狩猟の物語双方の中心的人物に仕立てるための加筆、修正がかなり明確に見えてくる。言い換えれば、白人と黒人の主題と、荒野をめぐる問題の主題との整合性に苦心した Faulkner の姿が読み取れるわけである。

ここで改めて、タイトル変更の経緯を振り返らなければならない。*Go Down, Moses and Other Stories* 出版直後に Haas に宛てた手紙⁽¹⁵⁾では、Faulkner は本の出来栄にはまったく満足していると述べているだけで不満は見受けられず、むしろ経済的な窮状を訴え、送金を依頼するものとなっている。さらに、先に触れた、構想を語った手紙の中では、「全体的な主題」を明確にしながらも「一冊本の短篇集」⁽¹⁶⁾という表現をしていることも看過できない。出版前後のこのような Faulkner 自身の姿勢を背景に据えるとき、タイトル変更を要請した彼の手紙⁽¹⁷⁾は、いささか奇異な感を免れない。*The Unvanquished* でも同じようにタイトルを付けたし、まったく無関係な二つの物語を含む *The Wild Palms* に関しても「*The Wild Palms* と、もう一つの物語」というタイトルにすべきだと考える人などいないとことわり、「初めて印刷されたタイトル・ページを見たときの（軽い）驚きを思い出します。八年前にあなたに書き送ったように、再版の際は、単に *Go Down, Moses* としてください」と述べている。こうした文面からは、作品の「統一性」を強硬に主張しようとする Faulkner の姿勢は読み取れない。このタイトル変更の要請を少し異なった角度から眺めることも必要ではなからうか。*Go Down, Moses* に対する Judith Wittenberg の見解は、この「角度」を提供してくれる示唆に富むものである。

Wittenberg は、*The Hamlet* とともに *Go Down, Moses* が作家の関心の本質的な変化を示していると指摘し、この作品で Faulkner は、純粹に個人的な問題をはるかに越えた問題への拡大し続ける関心を示していると説く。地域的ならびに国家的歴史における道徳と社会政治の問題、白人、黒人およびインディアンの間の人種問題、所有権の問題」などをこの作品に見られる新たな問題として指摘しながら、Faulkner の「意識の作家から良心の作家へという決定的な変

容」⁽¹⁸⁾を背後に読み取ろうとしている。Wittenberg の見解でとりわけ注目に価するのは、作家 Faulkner が、この作品を契機として変容し、その関心を拡大させていったと指摘する点である。Go Down, Moses が、黒人奴隷制というどこまでも払拭しがたい呪われた重い過去の影と特異な伝統に支配され、絶望的な崩壊とその再建の軌跡を辿りながら、常にその内部に自己矛盾を孕んできた南部の現実を映し出すだけの時間的な幅をもち、しかも個人による土地所有や文明批判といった一層幅広い問題までもそこに抱え込んでいることを思えば、Wittenberg の指摘は鋭いものと言わねばならない。

さらに、タイトル変更の要請の前後の作家の現実社会における位置についても一考しなければならない。まず、1946年 *The Portable Faulkner* の出版について触れなければならない。Malcolm Cowley の編纂によって Viking 社からこの書が出たことが契機となり、当時はすでにあまり顧みられなくなっていた Faulkner の正当な評価が始まり、彼に対する一般読者の関心も次第に高まっていくようになったことは意義深いことで、同年には Modern Library 社から *The Sound and the Fury* と *As I Lay Dying* が一冊本で再版された。また、1947年にはミシシッピ大学の英文学科の要請に応じて学生を相手の質疑応答を行ない、1948年にはアメリカ学士院会員に選出されたりもしている。1949年には *Go Down, Moses* のほかに *The Wild Palm* の再版も実現し、1950年にノーベル文学賞を授与されることになるのである。

この時期は、言わば Faulkner の社会的立場及び作家としての存在感が徐々に重いものへと変化していった時期でもあるのである。あくまでも個人的な立場に固執した作家であった Faulkner が、公の場になって、自らの文学のみならず、人種問題といったきわめて社会的な問題についても発言をする、あるいはしなければならない立場に係わらざるを得なくなったのである。こうした背景に Faulkner を据えるとき、Wittenberg が指摘するように、Faulkner の南部を眺める眼、あるいは南部そのものと対峙する姿勢に変化が生じつつあったことは想像に難くない。それゆえに、この作品のタイトル変更には、自らそこに生まれ、育った者として、自らの文学的世界を通して南部と向き合ってきた作家

が、次第に現実社会との抜き差しならぬ係わりに巻き込まれていく経緯が窺われるように思われるのである。

注

- (1) *Go Down, Moses and Other Stories* の再版に際して、Robert K. Haas より変更したい箇所の有無を尋ねられた Faulkner は、1949年1月26日付けの Haas 宛ての手紙の中で、‘and Other Stories’の部分を削除するよう求めている。(Joseph Blotner (ed.), *Selected Letters of William Faulkner*, pp. 284–85.)
- (2) Joseph Blotner (ed.), *Selected Letters of William Faulkner* (New York: Vintage Books, 1978), 139.
- (3) Cleanth Brooks, *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (New Haven: Yale University Press, 1963), 257.
- (4) Stanley Tick, “The Unity of *Go Down, Moses*,” *Twentieth Century Literature*, July 1962, 69.
- (5) John Pilkington, *The Heart of Yoknapatawpha* (Jackson: University Press of Mississippi, 1981), 259.
- (6) William Faulkner, *Go Down, Moses* (New York: Random House, 1942), 138. 以下この作品からの引用はすべてこの版により、頁数を括弧内に示す。
- (7) William Van O’Connor, *The Tangled Fire of William Faulkner* (New York: Gordian Press, Inc., 1968), 134.
- (8) Pilkington, 245.
- (9) この二人が、自分たちは小屋に住み、黒人奴隷たちを大きな屋敷に住ませたり、夕方奴隷を屋敷に入れる際も、その人数を数えた後は、表の入り口に釘を打ち込むだけで、裏口からの出入りは翌朝まで黙認していたことなどからも明らか。
- (10) Cleanth Brooks, 276–77.
- (11) Michael Millgate, *The Achievement of William Faulkner* (New York: Vintage Books, 1963), 211–12.
- (12) Michael Millgate, *Loc. cit.*
- (13) Pilkington, 243–86. Pilkington はテキストの成立経緯を簡潔にまとめている。
- (14) Michael Grimwood, *Heart in Conflict: Faulkner’s Struggles with Vocation* (Athens and London: The University of Georgia Press, 1987), 335. Grimwood は、“Delta Autumn”よりも“The Bear”の執筆の方が先行するとした James Early (*The Making of “Go Down, Moses”*) の誤りを、Blotner による伝記をもとに指摘している。

- (15) Joseph Blotner (ed.), 149–50.
- (16) この点に関しては、Dirk Kuyk も指摘している。(*Threads Cable Strong: William Faulkner's "Go Down, Moses,"* 14)
- (17) *Ibid.*, 284–85.
- (18) Judith Wittenberg, *Faulkner: The Transfiguration of Biography* (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1979), 191.
- (19) Allen Tate, “The Profession of Letters in the South,” in *The Literature of the South*, ed. Thomas Daniel Young (Glenview: Scott, Foresman and Company, 1968), 768.
- (20) Eric J. Sundquist, *Faulkner: The House Divided* (Baltimore: Johns Hopkins Univ. Press, 1983), ix.